

**日中植林・植樹国際連帯事業 北京科技大学等土木防災訪日代表团
参加者の感想（抜粋）**

○今回の日本での学習交流において、最も印象に残っているのは、日本国民全体或いはその大多数が地震等の自然災害に対して非常に慎重に行動し、周到な心構えでいることだ。

技術面から、東京大学、京都大学にて土木防災分野の物理研究方法を視察して理解を深め、兵庫耐震工学研究センターで、実際の家屋を用いて測定する耐震実験施設を見学した。墨田区防災まちづくり関係の視察では、日本が技術をしっかりと社会に応用しているのを目にした。こうした一連の視察や実践に、私はとても感心し、気持ちが高ぶった。「失敗を繰り返さないために事後の対策を取ることに遅いということはない」といったところだろうか。大地震発生後に、迅速に解決・救済の措置を取ることができる、こういった行動や姿勢は学ぶに値する。

土木工学専攻の学生として、私はとても感動したのと同時に、重大な任を重く受け止めた。帰国後、周りに防災措置の重要性、防災に対する正しい心構えの必要性を伝えたい。実際に災害とは私たちの身近で起こりうるものであり、自分を守ること、お互いに助け合うことを学び、災害に対する意識を高めたい。

今回の訪日で非常に多くのものを得ることができたのも、団長や秘書長のおかげである。入念な準備のおかげで、安全かつ順調に行うことができた。皆様お疲れ様でした。

○今回の「日中植林・植樹国際連帯事業」の土木防災をテーマにした訪問は、私にとって実り多いものだった。ここでは専門技術分野において学んだことを中心に総括したいと思う。

8日間にわたり、20項目近い視察活動を通し、私は日本の耐震、耐風、津波等の防災における各分野の、全体的な仕組みを理解することができた。私が貴重に思ったのは、今回の活動に東京大学工学系研究科、京都大学防災研究所及び兵庫耐震工学研究センター等、世界トップレベルの大学や研究機構の視察が組まれていたことだ。そこでは、防災分野における現在日本が研究している科学技術や、既に確立した技術について学んだ。研究機構の学者や技術者がこれらの科学技術の基本原理や実践方法について解説し、私達の質問に細かく答えてくれたので、非常に勉強になった。同時に、彼らの慎重で丁寧な姿勢に代表団の学生は影響を受け、視察後、多くの学生と私は関心のある問題について、引き続き意見を交わしたのだった。私は嬉しかった。学生達の興味をかき立て、問題解決の手助けができることは、大学教師にとってとても大事なことなのだ。私は日本の専門家や学者、科学技術者を見習い、学問に専念し、今後学生の見識を深めるために彼らを視察に連れて来たいと思う。

8日間はとても短いものだったが、日本の素朴で温かい人々、物事に対して注意深く丁寧に取り組む姿勢、それから歴史的文化遗产や環境保護等の分野全てが深く印象に残っている。帰国後、感じたもの全てを周りの親しい友人や同僚に伝えることで、微力ながら中日友好交流の懸け橋に貢献したい。

○北京科技大学等土木防災訪日代表团は、日中友好会館の多大なる支持を受け、日本の国土交通省水管理・国土保全局河川計画課国際室、東京大学工学系研究科、東京都住宅供給公社白鬚出張所、京都大学防災研究所、神戸市市街地整備課、兵庫耐震工学研究センター等の関連機関において、一人一人から温かいおもてなしを受け、また、耐震防災技術交流においては、具体的な質問に対して多くのベテラン教授や関係者から指導を受けることができ、とても勉強になった。

私は、明石海峡大橋のメインケーブルの通風乾燥システムに深く感銘を受けた。この通風乾燥システムは、明石海峡大橋のメインケーブルの防護に極めて重要な役割を果たしている。また、東京大学工学系研究科の規模の異なる3つの風工学実験室、京都大学防災研究所の境界層風洞実験室では、防災関連の適切で有効な実験データを提供頂いた。

兵庫耐震工学研究センターでは、宋波団長と同センターの副センター長が技術交流の後に、「日中植林・植樹国際連帯事業記念植樹」に一緒に参加した。

今回の交流が終わりを迎えるにあたり、この訪問に際しご尽力いただいた関係者の皆様にとっても感謝している。各方面の協力や苦労があったからこそ、今回の訪問が成功を収めたのである。

○今回の「日中植林・植樹国際連帯事業」では、北京科技大学等土木防災訪日代表団の一員として、たくさん学び、深く感銘を受けた。主な感想を下記にまとめる。

1. 日本は、防災・減災等の分野に多大な努力を払っている。国土交通省で受けた防災のためどのように河川を改造するかについての講義、墨田区と神戸の2つの防災まちづくり関係や公園の視察に、研究者の慎重かつ粘り強く、魂のこもった研究が反映されていないものは一つもなく、被害を如何に防ぐか、災害に如何に対応するか、どのように安全に住民を分散させるか、その全てに万全で秩序的なシステムと計画がある。
2. 環境保護を重視している。日本人のゴミの細分化や再利用の取り組みは、私達にとって非常に見習うべきものである。その他、日本の建築物や橋梁の多くが鉄骨構造で、ゴミを減らすことができると同時に耐震能力を高めている。
3. ルールづくりと実行力、これらは、生活のさまざまな面に反映されている。通勤には公共交通機関を利用し、自家用車は使わない、道を歩く時は押し合うことなく一列に並び、後ろを歩く人のためにスペースを空ける、エスカレータでは皆片側に立ち、ゴミは決まった時間に回収される等、細かいところにこそ国民性が表れている。
4. 人に優しい建築技術を理念とし、人を主体とし、建築物の使い心地と使いやすさを重視している。

8日間の訪問はもうすぐ終わってしまうが、今回のスケジュールは完璧で、専門性の強いものであった。日中友好会館及び中国側の団長や秘書長が全行程において入念に段取りして下さり、その細やかさと全力で仕事に打ち込む姿勢は、私達が学ぶべきところであり、深く印象に残っている。帰国後、これらの感想を周りに伝え、日中の長期的な友好交流に貢献したい。

○明日帰国の途に就く、それは7日間の訪問視察の旅が終わることを意味している。この短い数日間に、地震に対応して設計された日本の家屋や橋梁及び耐震・減災の研究に対する見識を深めることができた。これは私にとって、大学で学んだ知識と現実を結びつける貴重な機会だった。私もできる限り今回日本で得たものを周りの人と共有したい。

非常に印象深かったのが、政府や研究員から一般市民や子供まで、全ての日本国民が地震やその二次災害に強い関心を持っていることだ。国土交通省では、政府による地震対策の構築や、災害発生時の準備や計画について理解することができた。京都大学防災研究所や兵庫耐震工学研究センターでは、研究員の専門的で丁寧な説明を聞き、研究技術スタッフの科学に専心した姿勢を目にした。これらの研究は地震を未然に防ぐだけでなく、地滑りや土石流等の二次災害にも関連しており、研究員達のこうした観測や研究によって、災害を最小限に食い止めることができるのである。東京臨海広域防災公園や人と防災未来センターへ見学に来ているのは、私達同様、多くが学生や子供であり、幼い頃から防災意識が培われている。

今回の訪問視察の中で、私は日本の建築構造や耐震建築資材、緊急時のメカニズム等が中国と異なることに注目した。帰国後、今回見聞きしたことや関連知識を周りの同級生や友人と共有できる機会を作り、日本の文化や建築物の特色をより多くの人に理解してもらいたい。

○中国も日本も災害が頻繁に発生する国であり、洪水災害や地震災害等は常に両国で起きている。日本は阪神淡路大震災の後、全地域で防災・減災の技術研究が行われ、非常に満足いく研究成果を上げている。今回訪問・交流を行った日本国内のいくつかの減災・防災研究センターでもそれぞれ多くの価値ある科学研究の成果を上げ、実践経験を積んでいる。例えば、学校の校舎の振動台実験や橋脚の振動台実験等は、間違いなく中国の防災・減災の研究の参考となるものだ。中国においても多くの防災・減災に関する研究やモデルが行われており、2008年の四川大地震以来、防災意識も徐々に重視されるようになった。私達は日本の防災に対する科学理念を学び、日本の耐震・減災に関する最先端の科学研究の成果と経験を手本にしたい。未然に災害を防ぐこと、それは多くの人々に更なる幸福をもたらすのである。